
R

Mico

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R

【Nコード】

N5933D

【作者名】

Mico

【あらすじ】

瑠美と祐介は1年以上セフレを続けていた。しかし、瑠美が歌手デビュー決定の話をすると祐介はいきなり別れを切り出して…

第1章 代償（前書き）

初めての長編小説なので、いたらない点も多々あると思うので、よければ感想など書いて頂ければ幸いです。

第1章 代償

多くの人が改札口に向かって歩いて来る中で、瑠美はすぐに祐介を見つけた。

金髪で少し長めの髪を立たせ、サングラスをかけて、なんとなくだるそうに歩いてくるので、分かりやすかった。

瑠美が小さく手をふると、イヤホンを外し、表情を変えずにやってくる。

瑠美の隣に来て、

「最近さ…」

と歩きながら話し始め、瑠美は

「まじで!？」とか「ウケる～」と相づちを打つ。

隣にいられることが幸せで、瑠美の顔が次第ににやけてくる。

流行りの洋服を着て、背の高い瑠美は、祐介を追い越さないようにヒールの低い靴を履いて隣を歩く。

到着したのは行き着けのホテル。

慣れた手つきで適当な部屋のボタンを押す。

落ち着いた雰囲気部屋の小さなソファに並んで座り、祐介はタバコを吸い始める。

1ヶ月ぶりに逢った2人は、その1ヶ月の間に起こった面白い話を

中心にしていく。

1時間半、時には2時間近く話してからようやくベッドに入る。

それからまた30分ほど話す。今度は足を絡め、ベッドの中で抱き合いながら…

全て暗黙のルールみたいなものだった。

「ねえ？」

ん？とだけ答えた祐介は瑠美の鼻の頭を小さくくわえた。

「あたし…デビュー決まったんだ！」

「……良かったじゃん。おめでと」

祐介はおでこと瞼にキスをしながら言った。

「うん、ありがとう」

いつもの様に抱き合い

いつもの様にsexをして

いつもの様に一緒にお風呂に入って…

あっと言う間に時間が経ってしまった

「なあ…俺らの関係もう今日で終わりにしよう。」
着替えてる途中に急に祐介は言った。

えっ…

意味が分からない…

祐介は何を言ってるの？

自然と涙が零れ落ち、背中を向けたまま聞いた。

「なッ…んで？」

「その方が瑠美の為だろ？」

いつまでもセフレなんかやってたら…ダメなんだよ」

何言ってるの？

全然分かんない…

「…ッやだッ…よお…そんなのッ…」

「…泣くなッて」

祐介は後ろから瑠美をそっと抱きしめた。

どうやって祐介と別れて帰って来たのか

よく分からない…

覚えているのは…

祐介が抱きしめてくれた事と

帰りに自動販売機でタバコを買った事

誰もいない家に帰り、ほとんどとれかけたメイクを落とす。

帰りに買ったタバコは祐介がいつも吸っていた「R」と書かれた物
それと、祐介に渡すことの出来なかった「Y」のインシヤルが入っ
たZipproを持って瑠美はベランダに出た。夜風が肌に刺さる様
な寒さだ。

タバコに火をつけようとするが、風と慣れない手つきの為、なか
なかつかない。

ようやく火がつき、吸う。

ゲホッ…ゲホッ

初めてのタバコはうまく吸えず、咳き込むと涙が零れた。
それを何度も何度も繰り返し返す…

「アホらしい…」

そう思う頃にはタバコが吸えるようになっていた。
足元にはたくさんの吸い殻があった。

歌手になりたくて、20歳になった今年も
その前からずっと

タバコは吸わないようにしていた。

初めて吸ったタバコは、涙と混じって

苦くてマズかった。

「ツューすけえ…

…太陽がなきや…

月は…輝けないんだよ?」

いつも祐介は暖かく、瑠美にとって太陽のような存在だった。

いつも月を照らしてる太陽…

でも…

決して交わることはない。

やせ細った月が瑠美を一層悲しくさせ、ベランダにしゃがみ込んで
泣いた。

”祐介”と蚊の鳴く様な声で何度も何度も呼んだ。

季節はずれの蚊はあまりにも悲しそうだった…

第2章 閃光

s o m e d a y

すれ違った人の匂いや 季節や景色
どこにいたって 何をしてたって
君のことが頭から離れない
こんなにも君を想うだけで
苦しくて愛しさ募る気持ち

苦しくて 悲しくて 泣いた夜
暗闇に飲み込まれそうになっても
“ いつか必ずプラスになる ”
そう信じて
でも 目を閉じれば鮮明に
君の笑顔思い出せる

すれ違った人の姿や 声や雰囲気
どこにだって君を感じて
いつかまた 逢える気がして
愛しさが増す
叶わないものだも知っていても

いつか 君に届くように
どんな時も輝いて

いつか 君の心に届くように
どんな時も歌うんだ
いつか 君が気づくように…
そう いつか…

「はぁーっ。」

デビュー曲がいきなり失恋ソングで本当にいいのかなあ…
いくらOKもらっても…」

事務所の一室にこもって、瑠美は独り言を言った。

「俺はいいと思うよ?？」

元カレへの歌みたいな感じでさ。共感できる。」

「……はぁ。どうも…」

「あ、俺のこと知らないよね?？」
一応ここで歌手デビューするんだ。だから君とは同期みたいな感じかな?？」

「……あつ、そうなんですか。
えっと初めまして、瑠美です。
えっと…」

「名前言ってなかったね。
高田涼。よろしく。」

高田涼…

綺麗な名前…

すごい合ってる…

しかも顔が整ってて…

なんか…オーラが違う

「あつ…よろしく願いします」

って言っても…

こんな綺麗な人が同期って…

あたし劣ってる感じだ…

涼しげに、

だけど暖かく笑う

彼に瑠美はすっかり見とれていた。

何故だか分からないけれど

この時、彼があたしの心の暗闇に

一筋の光を差し込んでくれそうなきがした…

早速レコーディングが始まった。

すれ違った人の匂いや 季節や景色…

レコーディングは順調に進み、休憩していた。

「再来週の日曜日のことなんだけど、もうすぐデビューする人達でライブイベントやるから。」

そこでCD先行販売するから、明後日からプロモーションビデオの撮影。

これからハードだから頑張ってね。」

ライブやるの久しぶりだなあ

「はい。頑張ります。」

夜になってレコーディングが全て終わり、エレベーターを待っていた。

「お疲れー瑠美ちゃん」

「あ…高田さん、お疲れ様です。」

「あのさあ、敬語やめようよ。同期なんだし。」

まあ…俺の方が瑠美ちゃんより年上だと思っけど。もう28だしね」

少しだけ恥ずかしそうに笑った。

「じゃあ…涼さんって呼びますね」

「まだ敬語だし…」

ま、いっか。

それよりさ、アドレス教えてよ。」

チーン

エレベーターが到着して乗り込みながらアドレスを教えた。

「ライブ楽しみだなあ」

「そうで……だね」

「やっと笑った〜良かった。」

確かに最近笑ってなかったかも…

泣いてばかりで

全然前に進んでなかった…

第3章 太陽

「あたし…デビュー決まったんだ!」

瑠美がデビューが決まったと喜んでた。

でも俺は素直に喜べなかった…

勝手に瑠美のデビューが決まったら

この関係を終わらせようと思ってたから…

「……良かったじゃん。おめでと」

今日が最後のsexだ…

いつもより強く抱きしめて

いつもよりたくさんキスをして

いつもよりたくさん“印”をつけて…

そんなことしか出来ない俺…
情けねえや…

つか…言わなきゃな…

「なあ…俺らの関係もう今日で終わりにしよう。」

瑠美が体を小刻みに震わせ、泣きそうな声で

「なッ…んで？」

と尋ねた。

「その方が瑠美の為だろ？いつまでもセフレなんかやってたら、ダメなんだよ」

瑠美は更に体を震わせた。
きつと泣いてるんだろう。

「…ッやだよおッ…そんなのッ…」

最低だな…俺。

「…泣くなって」

俺は後ろから瑠美をそっと抱きしめることしか出来ない…

瑠美にとってこれから、俺がいることで面倒なことになったら困る。
瑠美には音楽活動に専念して欲しくて…

俺さ、最初から瑠美のこと愛してたんだ…

だから前に瑠美が“付き合っ”て言った時は

正直、すげえー嬉しかった。

でも俺はひどいこと言っただけかな。

“繋ぎでいいなら”

瑠美がそんな軽い気持ちで言っただけで事は分かってただけだ…

俺から瑠美が離れていく時に

自分が辛くなんねえようにしたんだよね。

自分のために…

瑠美は

“じゃあ、やっぱ止めとく。

これからちよくちよく小さなライブハウスでライブやるから忙しいし。”

って無理して笑ってたな…

あの時俺から言っただけで良かった…

“愛してる”

って…

もう…

瑠美の向日葵みたいに明るい笑顔は見れない。

俺を元気付けてくれる
魔法の笑顔…

失って

かけがえのない事に
ようやく気づいた。

“ 瑠美に逢いたい ”

でも…

瑠美はもう俺なんか逢いたくねえよな…

それでも逢う方法…

逢える場所…

ライブだ！！

検索すると明後日の夜だった。

デビュー前のイベントみたいなやつか。

他どうでもいいけど、瑠美に逢う一番いい方法だ。

瑠美が俺を見なくなっちゃっていい。

瑠美と話せなくてもいい。

ただ瑠美の向日葵のような笑顔と

あの声が聴ければいい。

瑠美…

今も歌っているんだろうか…

早く瑠美出て来ねえかな…

どうでもいいんだよ。

他の奴らなんか。

まあ…

リヨウとかいう奴はましだったな。

あ…瑠美だ。

うわっ…

瑠美のバラードやつぱやべえよ…

なんか痺れるってか

訴えられてる感じになるんだよな。

すれ違った人の匂いや 季節や景色

どこにいたって 何をしてたって

君のことが頭から離れない

こんなにも君を想うだけで

苦しくて愛しさ募る気持ち

…ん??

今瑠美と目合ったか??

…気のせいだよな。

っーか…

やっぱり最高だわ。

先行販売やってるらしいから買って帰ろう。

もう俺はこういう形でしか瑠美を応援できない。

もう一度だけ

瑠美の顔を見て帰ろう。

外で待ってみて

出来たら声でもかけよう。

“ すごい良かった ”

って…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5933d/>

R

2010年10月28日04時50分発行